江戸時代における「檀特」「十姉妹」の用例について
ー「衆禽画譜」におけるジュウシマツ *Lonchura striata* var. *domestica* に類似する鳥の同定結果を踏まえた考察ー

On the Usage of "Dandoku" and "Jyushimatsu" in the Edo Period
-Consideration based on the identification results of birds similar to the Bengalese finch *Lonchura striata* var. *domestica* in the "Shukingafu" (Pictures of Birds)

岩田篤志[1]

キーワード：衆禽画譜,檀特,十姉妹, ジユウシマツ,*Lonchura striata* var. *domestica*,コシジロキンパラ,*Lonchura striata*,コシグロキンパラ,*Lonchura. leucogastroides*,江戸時代

要旨：高松松平藩に伝来する衆禽画譜に掲載されているジュウシマツに類似する図をコシグロキンパラ及びコゲチャキンパラと同定するとともに、江戸時代における「檀特」とはコシジロキンパラの一亜種であるという従来の見解を否定した。また、衆禽画譜と他の図譜等の用例を比較し、江戸時代における「檀特」とはコシグロキンパラ、「十姉妹」とはカエデチョウ科の総称であることを示した。

1　はじめに

江戸時代の鳥類図譜等には「十姉妹」(ジュウシマツ、漢字表記は様々であるが、本稿では「十姉妹」と記載する)、「檀特」(ダントクまたはダンドク、本稿では「ダンドク」とする）と呼ばれるジュウシマツ *Lonchura striata* var. *domestica*（以下、「ジユウシマツ」は、本稿では作出品種を指す）類似の鳥が収録されていることがある。

現在の愛玩鳥であるジュウシマツは、ＤＮＡ分析からコシジロキンパラ *L. striata* が原種あることが明らかとなっているが（岡ノ谷 2010)、これら江戸時代に「十姉妹」及び「檀特」と呼ばれた鳥が何か、またそれらとジュウシマツとの関係については様々な見解がある。まず宇田川（1961）は、ジュウシマツの原種は中国南部からマレー半島に分布する「コシジロ（腰白）キンパラ（*Uroloncha striata paethontoptila*), 一名ダンドクとよぶ種類であろうとされている」としている。ただ同書では「ダンドク（檀特）　*Uroloncha acuticauda* Sharp-tailed Finch　インド・中国南部」ともしている。いずれにしても「檀特」とはコシジロキンパラの亜種であり、現在の分類に従えば *L. s. phaethontoptila* または亜種 *L. s. acuticauda* とする。また、菅原・柿澤（1993）は「檀特」とはジュウシマツの原種であるコシジロキンパラの亜種（亜種名については未記載）であり、「十姉妹」はその

[1]香川の野鳥を守る会、e-mail:kogera2002@gmail.com

品種改良個体であるとするとともに、「「蘭山禽譜」の”じうしまつ”の図はダンドクである」としている。これに対し、鷲尾（1996）は、「檀特」は同じカエデチョウ科のコシグロキンパラ *L. leucogastroides* であり、「十姉妹」とは特定の種をさすものではなく、「群れ」をなすフィンチ類、特にカエデチョウ科の全ての鳥をさす総称であるとしている。しかし、細川（2012）は、江戸時代には「十姉妹」と「檀特」の二種類の鳥が日本に持ち込まれており、両者の間では容易に混血ができることから「十姉妹」と「檀特」は共にコシジロキンパラの亜種であり、「十姉妹」は亜種 *L. s. swinhoei*、「檀特」は亜種 *L. s. subsquamicollis* であり、両亜種の混血も含めて品種改良されたのがジュウシマツであるとする。総括すると、「十姉妹」と「檀特」はいずれもコシジロキンパラ（その亜種や品種改良個体も含む）であるという見解と、「十姉妹」は一定の種の総称、「檀特」はコシグロキンパラであるという見解が並立している。

ところで、高松松平藩の五代藩主松平頼恭（よりたか）の命により制作された「衆禽画譜」の中にも、ジュウシマツに類似する鳥が 3 図 4 個体（1 図は一本の枝にとまった 2 個体を描いている）収録されている(図.衆禽画譜に収録されているジュウシマツ類似の鳥)。各図には、「十姉妹」(香川県歴史博物館友の会図譜刊行会（2005）における表 14-1、以下同じ）と「タンドリ（雄雌)」(表 14-3 及び表 14-4）という付札（他の図譜等の記載から「タンドク」と読むべきであろう）があるが、これらの図は、これまでの「檀特」「十姉妹」の用例に関する調査対象になっていない。

筆者は、衆禽画譜に収録された全ての図について種の同定を行い（岩田 2026)、表 14-1「十姉妹」はコゲチャキンパラ *L. fuscans*、表 14-3 及び表 14-4「タンドリ（雄雌)」はコシグロキンパラと同定した。本稿では、詳細な検討内容とともに同定結果を示すとともに、「檀特」はコシジロキンパラの一亜種とする主張(宇田川 1961、菅原・柿澤 1993、細川 2012)が成立しないことと、衆禽画譜も含めて江戸時代の各図譜における種名の用例が、「十姉妹」はカエデチョウ科の総称であり、「檀特」はコシグロキンパラであるという鷲尾（1996）の主張と一致することを示した。

なお、本稿における現在の和名及び学名は、野生種は IOC World Bird List (v15.1) Multilingual Version (Gill& Rasmussen 2025 閲覧）に、飼鳥は宇田川（1961）及び宇田川（1971）に準じた。

2　衆禽画譜におけるジュウシマツに類似する鳥の同定について

（1）方法

表 14-1「十姉妹」と、表 14-3 及び表 14-4「タンドリ（雄雌)」は、共に、嘴が太く短いこと、顔が黒く淡色のアイリングがあること、背と尾が暗褐色であり、尾が短い円尾であるという特徴があり、スズメ目カエデチョウ科キンパラ属の鳥である。また、これまで「檀特」は中国から輸入されたコシジロキンパラの一亜種であるという主張(宇田川 1961、菅原・柿澤 1993、細川 2012)がある。そこで衆禽画譜における各図と、コシジロキンパラが

分布する中国の鳥類図鑑（MacKinnon&Phillipps 2000)、「檀特」であるとの主張がある亜種 *L. s. subsquamicollis* が分布しているタイの鳥類図鑑（Lekagul&Round 1991)、さらに世界のキンパラ属を対象とした図鑑（Restall 1996)、愛玩鳥・家禽に関する図鑑（宇田川 1961, 1971）と比較して同定した。なお、細川（2012）による「檀特」はコシジロキンパラの一亜種という主張の論拠である「中国動物志」(中国科学院中国動物志編輯委員会 1998)も確認した。

同定は「高松松平家所蔵　衆禽画譜　水禽・野鳥」(香川県歴史博物館友の会図譜刊行会 2005）をもとに行った。原図ではないが、その特徴は十分確認でき、同定作業に影響はなかった。

（２）同定結果

(a) 表 14-1「十姉妹」について

表 14-1「十姉妹」は、嘴は青灰色、目先は黒くて淡色のアイリングがある、体は腰も含めて一様に細かな褐色の縦斑がある暗褐色であり、胸は他の部分に比して明瞭に明るい、尾羽はやや暗色という特徴があり、コゲチャキンパラであった。ボルネオ島に分布するコゲチャキンパラは、その成鳥は全身が暗茶褐色であり、上嘴より下嘴が淡色であるなど、表 14-1 の特徴に全て一致していた。また暗褐色の羽色から成鳥であった。コゲチャキンパラは羽色からは性の識別が困難である（Restall 1996）ため、性は不明であった。

なお、表 14-1「十姉妹」は、コシジロキンパラの亜種 *L. s. swinhoei*（細川（2012）の見解）やその作出品種であるジュウシマツ（菅原・柿澤（1993）の見解）ではなかった。まず、細川（2012）は中国中部から南部、台湾に生息する「華南亜種」*L. s. swinhoei* が「十姉妹」であるとする。しかし、Restall（1996）は、亜種 *L. s. swinhoei* 成鳥の腰はバフ色または細く白い縦斑のある淡褐色に描いた図を掲載し、腰はバフ色で茶色の斑がある(「The rump is buff with brown flecks」）と述べており、幼鳥は成鳥と比べより薄くバフ色味がある（「Paler and more buffish bird than the adult」）としている。いずれも表 14-1 とは明らかに一致せず、コシジロキンパラではなかった。

次に、表 14-1「十姉妹」は、ジュウシマツではなかった。ジュウシマツは全身白色のシロジュウシをはじめ、黒いもの、茶色いもの、こげ茶色のもの、肩の間だけが褐色のもの（コブチジュウシマツ)、東部の羽毛が逆立っているもの（ボンテンジュウシマツ）など、様々な品種が作出されている（宇田川 1971)。しかし、表 14-1 は腰も含めて体が一様に暗褐色であり、細かな淡褐色の縦斑があった。この特徴は宇田川（1961,1971）に掲載されているジュウシマツの各品種とは一致しなかった。また、衆禽画譜は宝暦 5 年（1755）年にはその一部が成立しているが（今橋 2005)、品種改良によってジュウシマツの原種（コシジロキンパラ)に羽色に乱れが現れ始めたのは文化年間(1804～1818)であり(宇田川 1971)、約 50 年の隔たりがあることからコシジロキンパラの品種改良個体でもなかった。なお、愛玩鳥としての品種改良においてジユウシマツは白色個体が作出されており、渡来後の早期

に、あえて表 14-1 のような暗色の個体を作出したとも考えられなかった。

(b) 表 14-3 及び表 14-4「タンドリ（雄雌)」について

表 14-3 及び表 14-4「タンドリ（雄雌)」は、コシグロキンパラであった。コシグロキンパラは、ジャワ島を中心とするインドネシアの一部に生息するコシジロキンパラに類似したキンパラ属の鳥である。体形はコシジロキンパラに類似するが、成鳥は①顔と同じく胸が黒色であること、②腹部がほぼ白色であること（雌の第 1 回冬羽の腹はほぼ白色だが脇に細かい縦斑があり、下尾筒近くでは淡黒色の横斑がある)、③腰は背と同じく暗褐色であることといった違いや、④コシジロキンパラの下尾筒が茶色または茶色がかった褐色であるのに対して、コシグロキンパラの下尾筒は黒色であるという特徴がある(Restall 1996)。表 14-3 及び表 14-4 は、これらの特徴①～④に全て一致していた。また、腹部の羽色から表 14-3 は雌の第 1 回冬羽であった。成鳥では雌雄は類似しており、表 14-4 は性不明・成鳥であった。

一方、宇田川（1961)、菅原・柿澤（1993）及び細川（2012）が主張するコシジロキンパラの一亜種ではなかった。まず、コシジロキンパラの基亜種 *L. s. striata* は腰が白いのが特徴であるが、表 14-3 及び表 14-4 の背から腰は、いずれも細く白い縦斑がある暗褐色であり一致しなかった。

次に、宇田川（1961）が主張する亜種 *L. s. phaethontoptila* 及び亜種 *L. s. acuticauda* ではなかった。亜種 *L. s. phaethontoptila* は台湾に分布し、同地で得られた成鳥を左側面から描いた図では腹と腰がクリーム色に描かれ、腰はバフ色で茶色の斑がある（「The rump is buff with brown flecks.」）こと（Restall 1996）から一致しなかった。また、亜種 *L. s. acuticauda* はミャンマーからインド北東部に分布し、インド北東部（ダージリン、カジア）などで得られた成鳥 3 羽の図では、腹と腰は白または黄白色に描かれており、腰はバフ色で細い茶色の斑があること、インド北東部でのみ腰は白（「The rump is usually buffish with slight brownish flecking,but birds from north-east India have a white rump」）であること（Restall 1996）から一致しなかった。

また、細川（2012）が主張する亜種 *L. s. subsquamicollis* ではなかった。細川（2012）は「中国動物志」(中国科学院中国動物志編輯委員会 1998）の白腰文鳥（コシジロキンパラ）の項に基づき、中国南部に生息する「雲南亜種」*L. s. subsquamicollis* が、「胸の中央あたりが完全な黒色」、「全体的にも羽色が濃い目で、腰の白さもあまり見られない」ことから「檀特」であるした。しかし「中国動物志」では、「雲南亜種」*L. s. subsquamicollis* は「胸的中部順黒」「下背及腰的前段灰白色,尾上覆羽黒褐色」と、胸の中央が純黒色であるが、腰の前段は灰白色であり上尾筒が黒褐色と記述していた。また幼羽も「胸羽灰褐色」「下背及腰灰白色」と、胸は灰褐色であるが、下背と腰は灰白色であると記述していた。いずれにしても亜種 *L. s. subsquamicollis* の成鳥・幼鳥とも「腰の白さもあまり見られない」とは述べていなかった。なお、同書に収録されているコシジロキンパラの図は、最も

広域に分布する「華南亜種」*L. s. swinhoei* と考えられるが、その腰は白く描かれていた。

また、他の中国の鳥類図鑑では、コシジロキンパラは白い腰（「white rump」）、幼鳥（「Immature」）でもバフ色の腰（「buffy rump」）とし、亜種 *L. s. subsquamicollis* の羽色に関して特筆はされていなかった（MacKinnon& Phillipps 2000）。MacKinnon& Phillipps（2000）では、複数の亜種が分布する場合、おおむね最も広く分布する亜種を図示し、雌雄や亜種、齢で明瞭に外見が異なる場合には別図を付しているように見受けられるが、コシジロキンパラは腰が白い個体（おそらく亜種 *L. s. swinhoei*）のみ描かれていることから、他に「腰の白さもあまり見られない」亜種が生息しているとは考えられなかった。

加えて、亜種 *L. s. subsquamicollis* が生息するタイでは、亜種 *L. s. subsquamicollis* の腰は白色（「white」）、幼鳥（「Juvenile」）の腰（「rump」）はバフ白色（「buffy-white」）とし、腰が白色に描かれた図が示されていた（Lekagul&Round 1991）。

さらに、Restall（1996）は、亜種 *L. s. subsquamicollis* については、ラオス・ビルマ、マレー半島、スマトラ島南部で得た各 1 個体を左側面から、またベトナムから得た 3 個体を左側面及び翼を開いた上面・下面から描いた図を示しており、その腰はほぼ白色または淡褐色（細い縦斑が描かれている場合有り）淡いバフ色また褐色の縦斑があるバフ色で描かれていた。また、雄の腰はクリーム色（「The rump is cleam」）、雌は同色（「there is no plumage difference that I could not detect」）と記述していた。

以上から、亜種 *L. s. subsquamicollis* について「腰の白さもあまり見られない」という細川（2012）の認識は誤りであり、これを論拠とした、腰が白くない「檀特」は亜種 *L. s. subsquamicollis* であるとした主張は成立しないと考える。

なお、コシジロキンパラのその他の亜種でもなかった。Restall（1996）は、コシジロキンパラの全亜種について、その腰は背や尾羽の暗褐色とは明確に異なる白色または淡褐色の図を掲載していた（亜種により細い縦斑が描かれている場合が有る）。このため、背から腰が同様に暗褐色であり、細く白い縦斑がある表 14-3 及び表 14-4 は、亜種 *L. s. phaethontoptila*、亜種 *L. s. subsquamicollis* 以外のどの亜種とも一致しなかった。

３　江戸時代の「檀特」「十姉妹」の用例について

（１）方法

衆禽画譜に描かれた表 14-1 はコゲチャキンパラ、表 14-3 及び表 14-4 はコシグロキンパラであり、これは宇田川（1961）、菅原・柿澤（1993）及び細川（2012）の見解には一致せず、鷲尾（1996）の見解に一致した。そこで次に、これらの衆禽画譜における「檀特」「十姉妹」の用例と、江戸時代における他の図譜での用例を比較した。

比較対象とした図譜等は、菅原・柿澤（1993）、鷲尾（1996）及び細川（2012）が「檀特」「十姉妹」の用例としてあげているものとした。まず、菅原・柿澤（1993）は、江戸時代後期の「檀特」の用例として①蘭山「蘭山禽譜　地」、②衆芳軒旧蔵「禽譜」、③牧野貞幹「鳥類写生図」（四軸）、④梅園「梅園禽譜」をあげている。また、「じうしまつ」（十

姉妹）の用例として⑤堀田正敦「禽譜」（堀田文庫）、⑥河野通明「奇鳥生写図」をあげるとともに、①「「蘭山禽譜」の”じうしまつ”の図はダンドクである。」としている。鷲尾（1996）は④梅園「梅園禽譜」、⑦水谷豊文「水谷禽譜」、⑧増山雪斎「百鳥図」の「檀特」をとりあげ、いずれもコシグロキンパラと同定している。細川（2012）は「檀特」「十姉妹」の用例として③牧野貞幹「鳥類写生図」の「ダンドク」、⑦水谷豊文「水谷禽譜」「ダンドク」、⑧増山雪斎「百鳥図」の「ダンドク」「十四満津」の図を引用している。

なお、各図についてはコゲチャキンパラやコシグロキンパラであるかを確認するにとどめ、種の同定は行わなかった。

（２）比較結果

各図譜の用例を比較した結果は表(表.他の図譜等の「檀特」及び「十姉妹」の用例)のとおりであった。

「檀特」は５つの図譜等のうち４つの図譜でコシグロキンパラを描いており、特定の種を示すという共通認識があったことを示唆する結果となった。確認できた図譜等のうち、③を除く①④⑦⑧の図譜等で描かれた「檀特」は、顔は黒く、後頭部から腰、尾までは暗褐色。胸は黒、腹は白色でありその境界は明瞭、腹は白くて雌と思われるもの（「野鳥」表14-3）を除き斑はないという共通の特徴を有していた。これらは衆禽画譜「野鳥」14-4と一致し、「檀特」は特定の種、すなわちコシグロキンパラを指す用例であった。このような傾向があったことから、唯一異なる用例である③は混用と考えられた。

次に、「十姉妹」は特定の種ではなく、カエデチョウ科の鳥類を指すことを示唆する結果となった。「檀特」を描いた図譜等と異なり、①③⑤⑧の「十姉妹」では、描かれた個体の特徴は様々であった。特に、③⑤のように同じ図譜のうちに明確に異なる複数の種が「十姉妹」として描かれる場合が有ることから、「檀特」のように特定種を指す意識がないことは明らかであった。

４　考察

衆禽画譜に描かれた表14-1「十姉妹」はコゲチャキンパラ、表14-3及び表14-4「タンドリ（雄雌)」はコシグロキンパラであった。また、衆禽画譜の用例は、「十姉妹」はカエデチョウ科の総称であり、「檀特」はコシグロキンパラであるという見解（鷲尾 1996）と一致した。これらの点を踏まえ、交雑可能性、江戸時代の認識、江戸時代の輸入状況の面からの考察を行った。

（１）「檀特」と「十姉妹」が交雑可能であることについて

コシジロキンパラを含むカエデチョウ科においては、交雑個体ができることは同種とみなす根拠にはならない。細川（2012）は「江戸時代、中国から運び込まれた十姉妹と檀特

の間では混血もあった。それにも関わらず、ＤＮＡ鑑定の示す結果がコシジロキンパラ一種であるというのなら、十姉妹と檀特はもともと同種であり、亜種の関係にあったことを強く示している。」と主張する。確かに現在のジュウシマツがコシジロキンパラを原種とすることはＤＮＡ分析の結果から明らかである（岡ノ谷 2010）。しかし一方で、「コシジロキンパラの仲間は、近縁のものが多くあり、これとかけ合わせた場合に雑種が生まれ、それが生殖能力をもっていて、つぎからつぎへと繁殖することは事実である」との指摘がある（宇田川 1961）。

実際に鷲尾（1996）は、ジュウシマツの雌と、当初「檀特」と想定したタイに産するキンパラ属、「アミメ」及び「ギンバシ」それぞれの雄との交雑個体を得ることに成功している。タイ産のキンパラ属の種名は明らかにしていないが、「アミメ」とは「アミハラ」とも呼ばれる中国南部等に産するシマキンパラ *L. punctulata*、「ギンバシ」とはインド等に産するカエデチョウ科ギンバシ属のギンバシ *Euodice malabarica* と考えられる。このようにコシジロキンパラのＤＮＡを有するジュウシマツは、同じキンパラ属の他種はもとより、属まで異なるギンバシ属の種との交雑も可能であり、交雑個体が得られることはジュウシマツ、「十姉妹」及び「檀特」が全てコシジロキンパラであるとする根拠にはならない。

（２）江戸時代の「十姉妹」の認識について

「十姉妹」がカエデチョウ科の総称であるという見解は、すでに江戸時代に指摘されている。鷲尾（1996）は堀田正敦「観文禽譜」に「按スルニ十姉妹ハ　唐山雑古禽ノ総名ニテ　一種ヲ云ニ非ナルニ似タリ　毛色一定セス　タントク咬嗢吧雀ノ類　皆同種ノリ」とあることから、「十姉妹」はカエデチョウ科の総称であるとしている。

この「十姉妹」に対する見解は、堀田正敦一人の考えではない。堀田正敦は、⑤堀田正敦「禽譜」折本（小）異國産小禽において、「宣胤按スルニ十姉妹ハ中華ノ雑禽ノ総名也　今俗一小鳥トナス者非也」「今按ルニダンドク　タンカラ　ジヤガタラ雀　碧鳥ノ類十姉妹ノ属ナル了ハ無論」と詳しく記している。まず「宣胤按スルニ」以下は、植木宣胤（人名の表記は鈴木（1995）に従う）の「羽譜」7巻（天明8年8月序）からの引用である。「羽譜」は観文禽譜で「最も頻繁に引用される鳥及びその飼育法についての解説書」であり、同書は「巷での広範な需要に応える高度な飼育技術をもった専門家の集団がこの時代に形成されていて、それを背景にした専門書」として、観文禽譜における「鳥の知識の一つの標準を担っている」という（鈴木 1995）。すなわち、堀田正敦のダンドク等は「十姉妹」の「属」であるという判断は、「羽譜」という「専門家の集団」の知識が反映されたものである。

植木宣胤や堀田正敦、加えて当時の「専門家の集団」という、いわば同時代の者たちが「十姉妹」は中国産の「雑禽」の総称であると述べていることは重要である。「十姉妹」は、佐藤成裕「飼籠鳥」の「十姉妹」の項に「享保の頃より　海舶載来る　今に至って持ち来る事なり」とあることから、日本に渡来したのは享保年間（1716年～1736年）であるとい

う（鷲尾 1996)。一方、衆禽画譜は少なくとも宝暦 5 年（1755）年には一部は成立し（今橋 2005)、その後の天明 8 年（1788 年）に「羽譜」が、寛政 6 年（1794 年）に「観文禽譜」が刊行されている。そうすると、「十姉妹」の初渡来から「羽譜」までは約 50～70 年程度の隔たりしかなく、その間に衆禽画譜が制作されていることから、植木宣胤らの考察はほぼ同時代の見解として重視すべきである。

「十姉妹」がカエデチョウ科の総称を指すとすれば、①蘭山「蘭山禽譜　地」における「十姉妹（シャカタラスズメ）ノ一種」という記載は、「カエデチョウ科の一種」という意味として正しく理解できる。加えて、様々な図譜等に収録された「十姉妹」が異なるだけでなく、同じ図譜に複数の種が「十姉妹」として収録されていることも理解できる。

加えて、衆禽画譜の表 14-1 の付札は、描写対象（コゲチャキンパラ）が「檀特」（コシグロキンパラ）ではないカエデチョウ科の鳥であると判断したことから、総称として「十姉妹」と記載したと理解できるのである。

（３）江戸時代の輸入状況について

「十姉妹」というカエデチョウ科の総称のなかから、コシグロキンパラのみ「檀特」という固有名称が付けられた点については、江戸時代の輸入状況からの推測が可能である。「十姉妹」の原種であるコシジロキンパラは中国を中心に分布し、コシグロキンパラは主にジャワ島に、コゲチャキンパラはその北に位置するボルネオ島（カリマンタン島）に生息している。江戸時代に輸入された鳥類のほとんどは、中国、インド、オーストラリアがつくる大きな三角形に囲まれたエリアから運ばれており、その三角形の中心は、オランダのアジア貿易の拠点であったバタヴィア（現ジャカルタ）を含むジャワ島であった（細川 2012)。鷲尾（1996）は、中国ではコシジロキンパラが最も多く捕獲でき、ジャワ島ではコシグロキンパラが最も多く獲れたと考えられることから、「十姉妹は中国のビジネスになる代表選手、ダンドクはジャワ島の代表選手」であったと推測している。このため、江戸時代には、ジャワ島に産することから南方から輸入され、腰が黒く腹が白いという特徴を有し、他のカエデチョウ科とは明確に識別できるコシグロキンパラを「檀特」と呼び、主に中国から輸入されていたコシジロキンパラの各亜種（Restall（1996）では 8 亜種に分類している）や、その他コシジロキンパラと類似するキンパラ属を含むカエデチョウ科を総称して「十姉妹」と呼んだと考えられる。

引用文献

Boonsong Lekagul&Phillip D.Round（1991）A guide to the Birds of Thailand. Saha Karn Bhaet Co.,Ltd, Bangkok.

中国科学院中国動物志編輯委員会（1998）中国動物志　鳥綱　第 14 巻（雀形目　文鳥科　雀科）. 科学出版社,北京.

細川博昭（2012）輸入された鳥、身近な鳥　江戸時代に描かれた鳥たち. ソフトバンクク

リエイティブ株式会社，東京.
今橋理子（2005）『衆禽画譜』と飼鳥愛好の時代．高松松平家所蔵　衆禽画譜　水禽・野鳥:108-115．香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会，香川.
岩田篤志（2026）衆禽画譜に収録された鳥類の同定結果からみた制作意図．Jxiv, DOI: https://doi.org/10.51094/jxiv.4618
John MacKinnon&Karen Phillipps（1991）Birds of China. OXFORD UNIVERSITY PRESS, New York.
香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会（2005）高松松平家所蔵　衆禽画譜　水禽・野鳥．香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会，香川.
日本鳥学会（2024）日本鳥類目録改訂第８版．日本鳥学会，東京.
岡ノ谷一夫（2010）岩波科学ライブラリー176　さえずり言語起源論　新版　小鳥の歌からヒトの言葉へ．株式会社岩波書店，東京.
Robin Restall（1996）MUNIAS AND MANNIKINS.PICA PRESS, East Sussex.
菅原浩・柿澤亮三（1993）図説日本鳥名由来辞典.柏書房，東京.
鈴木道男(1995)『觀文禽譜』と海外-図鑑に見える江戸の異国-堀田正敦の『觀文禽譜』(四).言語と文化（3）：1-32．東北大学言語文化部,仙台.
宇田川竜男（1961）原色飼鳥大図鑑．株式会社保育社，大阪.
宇田川竜男（1971）標準原色図鑑全集 18　飼鳥・家畜．株式会社保育社，大阪.
鷲尾絖一郎（1996）十姉妹の謎を追う！．株式会社近代文藝社，東京.
山階芳麿（1986）世界鳥類和名辞典．株式会社大学書林．東京.

※江戸時代の図譜は次により確認した。

①蘭山「蘭山禽譜　地」
小野蘭山 著『蘭山禽譜』,写．国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2537261　（参照 2025-09-19）

③牧野貞幹「鳥類写生図」（四軸）
牧野貞幹［画］『鳥類写生図』壹,写．国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/11299485　（参照 2025-09-19）

④梅園「梅園禽譜」
毛氏江元寿梅園直脚＜毛利梅園＞//撰輯『梅園禽譜』,写．天保 10（1839）序．国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1286915　（参照 2025-09-19）

⑤堀田正敦「禽譜」
堀田正敦『禽譜』折本（小）　異國産小禽，叡智の杜 Web 宮城県図書館古典籍類所蔵資料
https://eichi.library.pref.miyagi.jp/da/detail?data_id=042-1112549-0　（参照

2025-10-01)
⑥河野通明「奇鳥生写図」
河野通明//〔ほか画〕『奇鳥生写図』,写. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286926 (参照 2025-09-19)
⑦水谷豊文「水谷禽譜」
水谷豊文『水谷禽譜』[3],写. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2553656 (参照 2025-09-19)
⑧増山雪斎「百鳥図」
石顛道人＜増山雪斎＞//〔画〕『百鳥図』8,写. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1287233 (参照 2025-09-19)